

日本とロシアの 1736 年 —ソウザとゴンザに関する元老院史料が語るもの—

豊川 浩一

はじめに

1736 年 5 月 10 日付元老院布告は、2 名の日本人コジマ・シューリツとデミヤン・ポモールツォフに関して述べている貴重な史料である。¹ まずはこの元老院布告を見てみよう。

[1736 年] 5 月 10 日。元老院布告。ギリシア正教の信仰を受け容れた日本人シューリツとポモールツォフが日本語教育のために科学アカデミーに出仕すべきことについて。

統治せる元老院は、3 等文官にして受勲者たるミハイル・ガヴリーロヴィチ・ゴローフキン伯 [граф Михаил Гаврилович Головкин (1699-1754 年), ピョートル一世時代に宰相を務めた Г.И. Головкин 伯の息子—筆者の補足, 鍵括弧は以下同じ] の意見に従い、次のように命令を発した。第一。ギリシア正教の信仰を受け容れたる旧日本人コジマ・シューリツとデミヤン・ポモールツォフに対し、兩人共に科学アカデミーに出仕すべきこと。すなわちその母語を忘れることなく、ロシア人のうち科学アカデミーが適当と思う能力を有する者に対して特別な世話をさせるためである。彼らがいつも良き監督の下で良き状態にあるように、またその日本語習得のために、読み書きのできる兵士の子弟 2 名をサンクト・ペテルブルク衛戍学校にいる彼らの下に出来るだけ早く置くこと。彼らがとても熱心にその言葉を習得するように、彼らシューリツとポモールツォフには、以前から下賜している給与にさらに 5 カペイカずつ加えること。すなわち以前の給与を合わせると、一日 15 カペイカずつ各人に下賜すること。以上を歳出参議会から与えるものとする。一方、ギリシア正教の信仰をしっかりと信じるようにさせるため、彼らに陸軍幼年学校の建物内に住んでいる修道司祭の所へ通わせるよう命じる。修道司祭は [神の] 法を認識させるよう教え導くこと。また本を読むにあたって、熱心に監督すること。どういう方向に向かうかについて命ずること。上記ポモールツォフの

¹ Полное собрание законов Российской империи. Первое собрание (Далее: ПСЗ). Т. 9. № 6956. СПб., 1830. С. 812. 本文中の暦はとくに断らない限り、すべて当時ロシアで使用されていた旧露暦 (ユリウス暦) である。現在の西暦 (グレゴリウス暦) に直すには、18 世紀においては 11 日を加えるといふ。

打ち明けた内容に従い、イルクーツクに指令を発し、彼らが乗っていた日本船を直ちに捜索すること。その船の中に彼らの言葉で書かれた本があるかどうかを探し、ロシア人の誰がその本を奪ったのかを調べ、それらの本が現在誰の手元に在るのか、また日本語で書かれた本や手紙がどれだけあるのかを捜索すること。それらについて直ちに元老院に送るべきである。

以上が2名の日本人に関する1736年5月10日付元老院布告の全文である。ここに出てくる2名の日本人とは薩摩の漂流民ソウザ（宗左、1696-1736年）とゴンザ（権左、1717-1739年）のことである。1736年にペテルブルクの科学アカデミーに日本語学校が設立されたとき、とくに11歳で漂着したゴンザは17歳で教師となった。この少年が科学アカデミー司書補で言語学者アンドレイ・ボグダノフ（1692-1766年）と協力して世界最初の露日辞典『新スラヴ・日本語辞典』（1736年9月29日-38年10月27日）を編纂している。²

280年前の薩摩弁で書かれたこの辞書には、すでに「自由」という語まで使われており、哲学には「学者すること」という訳語があてられている。どのようにして2名の日本人がロシアのカムチャツカに漂着し、ペテルブルクにやって来て、さらには言語学者の手伝いをするようになったかについては、すでに村山七郎が詳しく紹介している。³ いずれにせよ、上記の布告は当時のロシアが日本にも関心を抱いていた証拠となろう。

従来、2名の日本人漂流民をめぐるのは、主に言語学的分析を中心に研究がなされてきた。⁴ 筆者が本稿で紹介するのは、18世紀前半のアンナ・イヴァノヴナ女帝（在位1730-40年）の政府が日本人漂流民を介してどのようなことを計画していたのかを明らかにすることである。国制的・社会的・経済的な観点に立ち、またロシアが行なっていた探検（学術遠征）という一連の動きのなかにも位置付けながら、果たしてロシア政府はペテルブルクに滞在している日本人をどのように扱おうとしていたのだろうか。

筆者はこの2名の日本人に関する史料の幾つかを、モスクワにあるロシア古法文書館（Российский государственный архив древних актов—以下РГАДАと略記）の元老院フォンドのなかに発見した。⁵ 冒頭の布告発布と並んで、大臣カビネットに次ぐ元老院というロシア政府の行政執行機関が日本人漂流民について検討しているということ自体驚くべきことであるが、そのことはロシアの将来を決定する方向性の一端を示していたと

² ゴンザ原著・村山七郎編『新スラヴ・日本語辞典』ナウカ、1985年。

³ 同上、7頁。村山七郎『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献』吉川弘文館、1965年、22-33頁。亀井高孝、村山七郎「日本漂流民とクンストカーメラ」『日本歴史』210号、1965年、2-20頁。

⁴ 註の2と3を参照されたい。

⁵ РГАДА. ф. 240. оп. 4. д. 164. л. 1108-1112об.

いえる。なお、18 世紀前半の歴史に関する最近の研究は大きく進展しており、⁶ ここではそれらの紹介を兼ねつつ、先の課題を検討しようとするものである。

1. 1730 年代初頭までのロシアによる探検

1-1. 「シベリアの道」探査からベーリングの遠征へ

17 世紀終わり、シベリアは中国への道に関心を抱くヨーロッパの学者や探検家にとって興味の対象となった。⁷ オランダやドイツの学者たちはその地域についての記述を刊行し始めた。⁸ ピョートル一世（大帝、在位 1682-1725 年）が権力の座についている間に、ロシアもこの努力を怠らなかつた。日本人漂流民デンベイ（伝兵衛）の発見者として有名なウラジーミル・アトラソフ（В.В. Атласов 1661? -1711 年）はヤクーツク・カザークの五十人長にしてシベリア官署役人であったが、彼に率いられたカザークの遠征はカムチャトカの調査を行ったことで知られている。⁹ 他方、ダニール・アンツィーフエフ

⁶ その最良の例は次の作品である。*Петрухинцев Н.Н. Внутренняя политика Анны Иоанновны (1730-1740). М., 2014.*

⁷ 日本において、シベリアへの強烈な関心を抱きつつ、探検とそれを成し遂げようとするヨーロッパやロシアの研究者の役割に焦点を当てて書かれ、読み物としてもすぐれたものに次のものがある。加藤九祚『シベリアに憑かれた人々（岩波新書 894）』岩波書店、1974 年。

⁸ ドイツの哲学者ライプニッツも中国に魅せられた一人であった（*Гелье В.И. Лейбниц и его век. Отношения Лейбница к России и Петру Великому. СПб., 2008. С. 600-601.*）。ちなみにアメリカの歴史家 R. ウォートマンはその論文に所収されている図版 52 を挙げている。これは「中国の万里の長城を前にした行列」というキャプションがつけられ、エヴァート、イズブランツ、イデス（アダム、ブランド）『モスクワから中国への 3 年に及ぶ陸路での旅』（ロンドン、1703 年）と題されたものである。ホルシュタイン生まれのオランダ商人イデスは 1677 年以来ロシアに居住した。1692 年、ピョートル 1 世は、1689 年に調印されるネルチンスク条約による清との交易を樹立するため、およびそれによる清の満足度を調査するために彼を清に派遣した。1695 年まで続く彼の使命は成功し、彼の記述は多くの言語に翻訳された（R. Wortman, “Text of Exploration and Russia’s European Identity,” in C.H. Whittaker, ed., *Russia Engages World, 1453-1825* (New York: Harvard University Press, 2003), p. 92. また、高野明『日本とロシア（紀伊國屋新書）』紀伊國屋書店、1971 年、19 頁、および R.E.F. Smith and David Christian, *Bread and Salt. A Social and Economic History of Food and Drink in Russia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), p. 230.（鈴木健夫、豊川浩一、齊藤君子、田辺三千広訳『パンと塩—ロシア食生活の社会経済史』平凡社、1999 年、318 頁）にもイデスに関する記述がある。

⁹ アトラソフの 1697 年のカムチャトカ遠征についての「陳述書」、および彼によって保護された日本人デンベイの「陳述書」については次を参照されたい。*Оглоблин Н.Н. Две «сказки» Вл. Атласова об открытии Камчатки // Чтения в Императорском Обществе истории и древностей российских при Московском Университете. 1891. Кн. 3. С. 1-18; Он же. Первый японец в России // Русская старина. Т. 72. СПб., 1891. С. 11-24.* 村山『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献』、3-17 頁。高野『日本とロシア』、49-55 頁。平川新監修、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子編『ロシア史料にみる 18-19 世紀の日露関係 第 3 集（北東アジア研究センター叢書第 31 号）』2008 年、

(Д.Я. Анцыферов, 生年不詳-1712年)とイヴァーン・コズィレーフスキー(И.П. Козыревский, 1680年頃, 没年不詳)はクリル諸島(千島列島)を調査した。¹⁰ いずれも探検は明確な目的を持った国家プロジェクトであった。

ピョートルとライプニッツ(G.W. Leibnitz, 1646-1716年)との往復書簡のなかで、この初期啓蒙主義の著名なドイツの哲学者は果たしてアジアが北アメリカと陸続きであるのかどうかと疑問を呈し、皇帝はその答えを見出そうと決心した。¹¹ 1720年、ピョートルは二人の若き測量技師イヴァン・エヴレイノフ(И. Евреинов)とフョードル・ルジン(Ф. Лужин)に次のように命じた。「トボリスクへ行け。トボリスクから案内を伴ってカムチャトカ、およびさらに二人が目にするその先へと旅せよ。アメリカがアジアと陸続きであるかどうか判別すべく、それらの土地を叙述せよ。こうしたことは大いなる注意を払って行われなければならない」、¹² と。すでに前年の1719年、彼ら二人にピョートルは日本および東インドへの道を探求させようとし、またそれとは別に1723年にはマダガスカルへの探検を計画していたのは驚くべきことである。¹³ しかし測量技師たちが成しえたのはピョートルにクリル諸島の地図一枚を提出することだけであった。

死の床にあって失望したピョートルは、デンマーク人ヴィトウス・ベーリング(V.J. Bering / В.Й. Беринг, 1681-1741年)に訓令を発して先の仕事を託すことになる。¹⁴ 彼はその調査で陸伝いに太平洋にまで達するのに3年を要した。ベーリングはオホーツクで一度彼の船である聖ガヴリール号を建造したが、最初の探検(第一次カムチャトカ探検1725-30年)は満足のいくものではなく、アメリカに達することはできなかった。しかし、こうした探検は単に学術的な使命のみを帯びていたのではなく、ロシア帝国がさらに突き進んだ植民地的膨張を行い得るかどうかという方向性を見定めることにもあった。そのことは将来の露米会社の行動を見るとより明らかとなるであろうし、¹⁵ 元老院

17-23, 24-29 頁。なお、管見の限り、デンバイについての数少ない貴重な手稿史料は「シベリア官署」に残されている(РГАДА. ф. 214. оп. 5. д. 756. л. 1 и др.)。

¹⁰ Erich Donnert (translated from the German by Alison and Alistair Wightman), *Russia in the Age of the Enlightenment* (Leipzig: Edition Leipzig, 1986), pp. 95-96.

¹¹ Гелье В.И. Лейбниц и его век. Отношения Лейбница к России и Петру Великому. С. 763-765.

¹² Соловьев С.М. История России с древнейших времен. Кн. 9. Т. 18. М., 1993. С. 516-517.

¹³ Андреев А.И. Экспедиция В. Беринга (приложение: Записка И.К. Кирилова о камчатских экспедициях 1733 г.) // Известия Всесоюзного географического общества. Т. 75. Вып. 2. 1943. С. 4-5.; Петрухинцев Н.Н. Внутренняя политика Анны Иоанновны (1730-1740). С. 399-400.

¹⁴ ベーリングに宛てたピョートル一世の訓令(日付はピョートルの死後の1725年2月5日となっている)は次を参照されたい。ПСЗ. Т. 7. № 4649. С. 413。(拙訳および解説、歴史学研究会編『世界史史料⑥ ヨーロッパ近代社会の形成から帝国主義へ 18・19世紀』岩波書店、2007年、83-84頁)。

¹⁵ 露米会社についてはさしあたり以下を参照されたい。阿部誠士「アラスカ売却交渉(上)」『生活学園短期大学紀要』第6号、1982年、130頁。および森永貴子『イルクーツク商人とキャフタ貿易』北海道大学出版会、2010年、72-78頁。

秘書官長にして地理学者 И.К.キリーロフが率いたオレンブルク遠征もそのことをよく示してしているのである。

以上のこととは別に、ピョートルのカビネットの書類のなかには西インド諸島のトバゴ島購入計画についての文書が残されている。1721 年のこの計画はサンクト・ペテルブルクとラテン・アメリカの間に直接の交易を発展させることを考えたものであったが、その計画の背景には「そのうちに、この島からロシアは大きな利益を得ることができるかもしれない」という考えがあった。¹⁶

ちなみに国内外の情報すべてが集まる元老院に秘書官長として勤務し、また科学アカデミーでも地理学者として重要な役割を担っていた И.К.キリーロフは上記の状況を十分に理解しており、学術遠征のさまざまな計画において果たした役割は大きかったであろう。現代ロシアの歴史家 Н.Н.ペトルヒンツェフの研究によれば、ベーリングの第二次カムチャトカ遠征計画とキリーロフのオホーツクを経由して極東開発を図る考えは、ベーリングとキリーロフの意見交換の産物であり、そのことはベーリングの第二次カムチャトカ遠征計画を元老院で検討推進する上で大きな力となった。おそらくキリーロフは当該遠征の所轄官庁であるシベリア官署を統括していた元老院検事総長 П.И.ヤグジンスキー (П.И. Ягжинский, 1683-1736 年, 1722-26 および 30-31 年検事総長, 35 年以降大臣カビネットのメンバー) の協力を得ることに期待をかけていたのであろう。¹⁷

1-2. ベーリングの第二次カムチャトカ探検

1732 年末になってやっとベーリングによる第二次遠征計画の手直しと諸機関の間の調整が終了し、同年 12 月 31 日、元老院の承認する上申書が女帝に提出された。細かく 8 つの部隊に分けられた遠征隊には調査すべき 4 つの課題が与えられていた。第一に、「艦隊中尉たちの (лейтенантов флота) 指揮のもと各部隊による北海航路の調査 (遠征の北方隊 Северные отряды экспедиции), 第二に、シベリアの天体観測, 地図作成, 経済地理学および歴史民族誌上の記述 (学術隊 научный отряд), 第三に、日本と中国への航路調査, および諸島ならびに沿岸の記述 (シパンベルクの「日本」隊 «японский» отряд Шпанберга), 第四に、アメリカへの航路調査およびロシアにアメリカの海岸の一部が結合している可能性があるアメリカ海岸の調査 (ベーリングの「アメリカ」隊 «американский» отряд Беринга) である。¹⁸ すなわち探検隊は、海を探検してアメリカの

¹⁶ Ден Д. История Российского флота в царствование Петра Великого. СПб., 1999. С. 186, примечание 382.

¹⁷ Петрухинцев Н.Н. Внутренняя политика Анны Иоанновны (1730-1740). С. 400.

¹⁸ Там же. С. 404. また平川監修, 寺山, 畠山, 小野寺編『ロシア史料にみる 18-19 世紀の日露関係 第 3 集』, 79-92 頁も参照されたい。

海岸へと向かうこと、および陸地を探検してシベリアについてのさまざまな調査・叙述を行うことが命じられていた。ライブニッツに示唆され、ピョートルの発案によりその死後（1725年）に創設される科学アカデミーは、¹⁹ 1733-43年に行われたベーリングの第二次カムチャトカ探検を後援することになった。

海の探検は壮大かつ困難を極めた。トボリスクから船が建造されるオホーツクまで装備と供給品の移送には何百台もの橇が必要となり、結果的に探検は8年を要した。ベーリングはついに北アメリカの海岸を見つけたが、本人は帰途病没した。

2. ソウザとゴンザのロシア漂着

2-1. 漂流からペテルブルク到着まで

上述の元老院秘書官長 И.К.キリーロフのアンナ女帝に宛てた有名な『草案』の中にも日本との交易について触れている個所がある。キリーロフの計画では、ロシア南東地域の鉱物資源などの富を獲得しながら、カザフなどの中央アジアを経てインドへの商業路の開発を考えているのである。この草案の最後の部分の記述によると、中国へ至る道が開かれ、さらには日本にまで達することが可能であるという。²⁰ すでにアンナ女帝時代には、日本へ関心が向いていたということであろう。

以下、B.バルトリド、C.ズナメンスキー、そして村山七郎の研究を基にソウザとゴンザのカムチャトカ漂流後のあらましを記しておこう。

1728年（享保13年）11月、薩摩藩主松平大隅守（島津継豊）の命令で、大坂に住む薩摩藩関係者に米、紙などを届けるために、17名の乗組員が若潮丸で薩摩を出帆した。暴風雨のため大海に押し流されて、翌29年6月7日、6ヶ月間海上を漂った日本船がロパトカ岬の近くのカムチャトカ沿岸に漂着した。7月、カザーク五十人長シュティンニコフに率いられたカムチャダル人が日本人の仮小屋の近くを通りかかった。シュティンニコフは彼らから贈物を受け取り、最初のうちは友好的に振る舞った。その後二日にわたって一緒に生活した後、彼は突然夜中に日本人を置き去りにして、30ヴェルスタ彼方の日本人の見捨てた船が漂着した場所へすべての鉄具をはぎ取るために移動した。シュティンニコフがカムチャダル人らとともに仕事にとりかかっていたとき、いずれかに居住地を探すために出発した日本人たちがボートで現れた。シュティンニコフの命令で

¹⁹ Гелье В.И. Лейбниц и его век. Отношения Лейбница к России и Петру Великому. С. 766-767.

²⁰ НИОР РГБ (Научно-исследовательский отдел рукописей Российской государственной библиотеки). ф. 222. карт. XI. л. 169; Материалы по истории России. Сборник указов и других документов, касающихся упавления и устройства Оренбургского края. 1734 год. По архивным документам тургайского областного правления. Т. 1. / Добросмыслов А.Н. (сост.). Оренбург, 1900. С. 45.

カムチャダル人は日本人を追いかけ、海に飛び込んで溺れている者たちを撃ち殺した。17名のうち助かったのは大人のソウザと11歳のゴンザだけで、彼らは五十人長に捕えられ奴隷にされた。日本人たちの商品や財産の掠奪が始まり、最も多くのもを獲得したのはシュティンニコフであった。2名の日本人はヴェルフネ・オストログおよびニジニ・カムチャトカに住むことになった。

シベリアの地方当局はこの事件に関心を持ち、カムチャトカの隊長ノヴゴロドツェフが審理を開始してシュティンニコフを投獄するとともに、捕らわれて奴隷にされていた日本人たちを解放した。ちょうどこのとき、カムチャトカに到着していたワシーリー・シェスタコフは、この審理を自分の手で行おうとしたが、ノヴゴロドツェフはこれを自分に任せてくれるよう説得した。日本人たちの財産はさらに多くの者の手にわたることになり、この分配に、シェスタコフ、彼らの補佐役、書記、ノヴォゴロドツェフ兄弟、それにコサックたちが加わった。彼らが手に入れたものは、縮緬の反物、赤い敷物、袖長外套、襦袢、刀、包丁、筆箱、剃刀箱古2個、木椀と陶椀、鏡台、墨壺2個、風信旗3個、香木、その他である。のちに明らかになったように、強欲な掠奪者で収賄者でもあったノヴゴロドツェフがシュティンニコフを投獄したのは、後者が略奪した日本人の品物を自分に分配することを拒否したからである。

シェスタコフはボリシェレツクに到着した際、ロパトカ岬で日本製らしい錨と鉄具が、またアワチャ湾では日本製らしい品物が発見されたことを知り、これらの品物を調査すべく部下の一人を派遣した。この者は3個の日本製錨と3ブード10フントの船から取り外された鉄具類および品物を持ち帰り、これらを国庫収納簿に記入した。

1733年、トボリスクからの命令で、「出張審査官」メルリン少佐がカムチャトカの調査のためにやって来たが、彼は特に日本人殺害事件の調査を委任されていた。審理の結果、ノヴゴロドツェフはこれまでの掠奪と収賄のために、またシュティンニコフは日本人たちに対する残虐行為のために絞首刑にされた。

カムチャトカ当局は従来の先例から、「生ける証人」たちが日本について興味ある事実を提供するであろうと考えたので、1731年、ソウザとゴンザはカムチャトカからヤクーツクへ送られた。そこで5週間滞在した後、ヤクーツク当局は、彼らをさらにシベリア行政の中心地トボリスクへ送った。4週間滞在するうちに、日本人たちが首都において興味を引くであろう事が明らかになった。そのためソウザとゴンザは、シベリア官署の処置を仰ぐべく伝令役の案内者たちとともにモスクワへ送られ（滞在1週間）、2名の日本人は女帝アンナ・イヴァノヴナに接見し、幼年学校付属修道司祭に引き渡され、34年10月20日にはキリスト教の洗礼を受けた。洗礼とともにソウザはコジマ・シューリツ（Козьма Шульц）、ゴンザはデミヤン・ポモールツォフ（Демьян Поморцов）と改名

した。²¹

2-2. ペテルブルク日本語学校の開設

1735年、ゴンザはロシア語文法を学ぶためにペテルブルクのアレクサンドル=ネフスキー神学校に引き渡され、その後、2名は科学アカデミーに送られた。翌36年、日本語を忘れないため、「ロシア人の年少者」に日本語を教授することを命ずる勅令が発せられた。同年、ペテルブルクの科学アカデミーに日本語学校が開設された。²² そこでゴンザによる日本語授業が開始された。その監督者は科学アカデミー司書補アンドレイ・イヴァノヴィチ・ボグダノフである。

彼らのうちソウザ（コジマ・シューリツ）は1736年9月18日に43歳で没した。有能であった若いゴンザ（デミアン・ポモールツォフ）は、1739年12月15日に21歳で死去する前に、政府の命令により、年俸100ルーブリの支給、日本語学校生と2名の他に3名の増員が決定されていた。しかし、ゴンザの死去により、2人の年長の生徒フェネフとシュナヌイキンは独力で日本語の研究を終了し、他の3人の生徒たちに日本語を教授しなければならなかった。

ゴンザはソウザの死後、1736年から3年間、アカデミー日本語学校の監督アンドレイ・ボグダノフと共同して、ロシア最初の『露日語彙集』（1736年）、『日本語会話入門』（1736年）、『項目別露和辞典』（1736年）、『簡略日本文法』（1738年）、『新スラヴ・日本語辞典』（1736年9月29日-1738年10月27日）、『友好会話手本集』（1739年）、および『Orbis pictus（図解感覚世界）』（1739年、J.A. コメニウス著の日本語訳）といった7編を編纂した。²³ これらは草稿のままアカデミー図書館に保管されていたが、第2・3番目の作品は村山七郎によって復元され、²⁴ 第5番目の辞典は同じく村山によって刊行された。²⁵

²¹ ウェ・バルトリド（外務省調査部訳）『欧州殊に露西亜に於ける東洋研究史』生活社、1942年、380-381頁。S.ズナメンスキー（秋月俊幸訳）『ロシア人の日本発見 北太平洋における航海と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1979年、101-107頁。村山『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献』、22-33頁。

²² バルトリド『欧州殊に露西亜に於ける東洋研究史』、380頁。

²³ 村山『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献』、29-30頁。ゴンザ原著、村山編『新スラヴ・日本語辞典』、24頁。なお最後の作品は原典からの日本語訳があり、そのなかでゴンザのこと、それを紹介した村山のことが記されている（井ノ口淳三訳『世界図絵（平凡社ライブラリー110）』平凡社、1995年、359-362頁）。

²⁴ 村山『漂流民の言語—ロシアへの漂流民の方言学的貢献』、38-80、81-128頁。

²⁵ 註2にあげた著書がそれである。

3. 元老院史料の語るもの

3-1. 1736 年 4 月 13 日付ゴローフキンの提案（意見書）

すでに述べたように、モスクワの古法文書館には 2 人に関する史料が保管されている。これは、フォンド 248 番（「元老院」）・目録 4 番・事案 164 番「シベリア官署および貨幣官房に関わる、1730 年から 38 年までのシベリア問題および中国へのキャラヴァンに関する調査委員会の事案」という史料群に収められている一件である。より具体的には、この一件は「1736-1739 年。カムチャトカ沿岸に打ち上げられた日本船から捕虜となり、ペテルブルクへ連れてこられた 2 名の日本人の利用に関する元老院議員ミハイール・ガヴリーロヴィチ・ゴローフキン伯の提案。すなわちベーリング指揮のカムチャトカ遠征隊が日本と交易関係を打ち立てた際、通訳にする目的を持って彼らによって日本語をロシア人生徒に学ばせること」と表題がつけられている。²⁶

これは 1736 年 4 月 13 日に元老院で読みあげられた文書で、そのなかで M.Γ.ゴローフキン伯は次のように提案している。

1249 番。(1109 葉) 統治せる元老院には周知のことであるが、今を去ること約 2 年前、カムチャトカ沿岸に一隻の日本船が漂着した。その中には 17 人がいた。これらの日本人を一人のカザーク [シュティンニコフ] が見て、彼自らが用心したのである。なぜなら彼は自身が仲裁者 (третей) にすぎなかったからである。しかし彼は新たに陣容を立て直してやって来た。[その結果、日本人で] 生き残った者は 2 人だけとなった。かつて、私の口頭の提案によって、生き残った 2 人の日本人たちをサンクト・ペテルブルクに連れて来て、ロシア語を習わせるためにアレクサンドル=ネフスキー修道院に住ませた。その後、2 人はキリスト教の信仰に改宗し、私の提案に従って、統治せる元老院に引き渡された。というのも、そのうち彼らから何か利益を得ることができるかも知れないので、彼らは科学アカデミーにいるのである。現在、知られているところによると、彼らのうちの一人が 16 歳 [実際は 17 歳か 18 歳] で、書くことを習い、いま一人は彼よりも年長で約 40 歳である。彼らは本の装丁をしている。それゆえ、彼らが科学アカデミーに送られ、彼らから役に立つことを一つも期待できないとしても、そのために統治せる元老院に、次のような私の意見を提案するのである。なんとなれば、彼らのうちの 1 名は若くてロシア語の読み書きを学習することができる。もう一人はロシア語があまりできない。そのために、当該の人物 [ゴンザ] がロシア語の読み

²⁶ РГАДА. ф. 240. оп. 4. д. 164. л. 1108-1112об.

書きを習得し、(1109 葉裏) 自らの母語である日本語を忘れることがないように彼らを一緒に住まわせなければならない。今後、必要が生じた際には、彼に元老院で測地学者あるいは少尉補の監督のもとにいるよう命じる。シューリツあるいは誰かに、そのもとで「ポモールツォフが」生活することができるように命ずる。彼に俸給を支給することを定め、彼を監督すべきである。それは、少しずつ日本語を習うことができる従順な兵士の子弟から2名を選び、何時も彼のもとの暮らさせるためである。その間、キリスト教信仰をより堅固にするため、陸軍幼年学校に住んでいる修道司祭のもとに時折通い、神の法を知るためにしかるべきものを読むことを彼に命ずる。当の若い日本人が私に語ったところによると、船にあった彼らの大量の日本語の本が多く奪われたという。多年を要せずにそれらを彼がロシア語に翻訳すべくそれらの本を探し出すべきである。彼が成人に達したならば、そのときには結婚させること、またその行為に報いることは必要である。というのも、かつてロシアには誰もいなかった日本語を知るような人々がロシアに存在することに、彼が満足するためにもそうすべきである。そのうち、彼は日本語の通訳者になり得るであろうし、そのことが大いに求められていることを他の人たちに教えるであろう。(1111 葉、1110 葉は欠) カムチャトカ遠征に派遣されたベーリング隊長、あるいは「日本に至る」航路発見のための別の隊長が、日本に至り、ロシアと交易をすることになれば、その場合には彼が利用できるのである。また、有益な状況を引き出す土地本来のあらゆる利益を彼から期待できる。その点において彼に期待を抱くことができる。キリスト教信仰を確固たるものとし、妻を娶ることによって義務を負わせ、報償を与えることによって彼が満足し、そのためにも、私の意見に従って、衣服を作るべく彼に俸給を増加すべきである。そうすれば彼はより熱心に励むであろう。彼のいま一人の仲間にも衣服を作り、俸給を与えることによって満足させるべきなのである。

以上のゴローフキンの提案の内容は、2名の日本人漂流民のうち1名が語学の才能があること、彼にロシア語教育を施し、ロシア人の子弟に対して日本語教育を行なうこと、キリスト教信仰を確固たるものにする、そのためにも結婚させるべきであるという。それらは何よりも将来における日本との交易のために必要不可欠であるという。ここに2名の日本人に対する処遇を急がせる大きな理由があった。また、これは当時のロシアが行っていた科学アカデミーによる探検とも関連していたことも忘れてはならない。以上の提案に従って、アンナ女帝は命令を下し、5月10日、元老院が上記について命令を発することになった。²⁷ それに従って、元老院布告が同日出されることになり、それが本稿冒頭で述べた布告となって現れたのである。

なお、このゴローフキンは、ピョートル1世時代の宰相 Г.И.ゴローフキン伯 (Г.И.

²⁷ Там же. л. 1112-1112об.

Головкин, 1660-1734 年, 1709 年以降宰相, 18 年以降外務参議会総裁, 26-30 年最高枢密院議員, 31-34 年大臣カビネットのメンバー) の息子として生まれた人物である。当時、彼は元老院議員にして造幣局監督局長であり、アンナ女帝の寵臣エルンスト・ビローン (Ernst Johann von Biron / Э.И. Бирон, 1690-1772 年) を後ろ盾にして政府の中枢と関係があった。そのこともあってか、彼の意見書は容易に通過したのであろう。ちなみに、直属の部下であるワシーリー・タティーシチェフ (В.Н. Татищев, 1686-1750 年) は、彼がビローンの政敵アルテミー・ヴォルィーンスキー公 (А.П. Волынский, 1689-1740 年, 38 年以降大臣カビネットのメンバー) から非公式に庇護を受けているという理由で、ゴローフキンからさまざまな中傷や嫌がらせを受けていた。²⁸

3-2. 提案の実現へ向けた動き

その後、5 月 10 日付元老院布告の内容を実現するために、より具体的な命令が発せられることになった。5 月 25 日、アンナ女帝は科学アカデミーに布告を下した。これが元老院フォンドでは 3234 番と番号が付された文書である。²⁹ 続く 3235 番の元老院文書は日付が不明ではあるが (おそらく 5 月 25 日に発せられたのであろう)、2 名の日本人に対して歳出参議会から 5 カペイカ付加した俸給の支給を命じている。³⁰ 3236 番の文書は軍事参議会に兵士の子弟のうち読み書き能力のある 2 名を選び出すようにと命じている (5 月 25 日付)。³¹

この同じ 5 月 25 日には、他にも多方面に女帝の布告が出された。すなわち文書番号 3237 番は陸軍幼年学校官房へ、³² 3238 番はシベリア官署へ発せられた。³³ ちなみに陸軍幼年学校は 1731 年に創設されていた。

3-3. 1730 年代末のロシアの日本接近

ロシアの船が初めて日本の沿岸に現れ、ロシア人が日本の土地に足跡を残したのは 1739 年 (元文 4 年) のことである。ベーリングの第二次探検隊に加わった一行のうち、デンマーク人マルティン・シパンベルク (M. Spanberg / М.П. Шпанберг, 1696-1761 年) 大尉に率いられた 4 隻の船が 1739 年 6 月 1 日にカムチャトカ半島のボリシェレツクを

²⁸ この辺の事情については以下を参照されたい。阿部重雄『タチーシチェフ研究—18 世紀ロシア—官僚=知識人の生涯と業績』刀水書房, 1996 年, 269, 271, 273 頁。

²⁹ РГАДА. ф. 240. оп. 4. д. 164. л. 1113-1114.

³⁰ Там же. л. 1115.

³¹ Там же. л. 1115об.

³² Там же. л. 1116.

³³ Там же. л. 1117.

出帆し、日本への航路発見の航海に出た。このうち3隻は仙台藩領の牡鹿郡田代島沖に達した。彼らは日本人から米、野菜、たばこなどを受け取り、それと引き換えにロシアの貨幣や羅紗等を与えた。³⁴

これとは別に、同年、ウォルトン（あるいはヴァリトンかヴェリトン）に率いられた聖ガヴリール号は、安房国長狭郡天津村（現在の千葉県天津小湊町）の沖合に達し、8人の乗組員がボートで上陸して漁師から水の提供を受けたうえ、飯と酒を馳走になった。彼らはさらに南下して伊豆の下田沖に達し、この地上陸した乗組員はみかんの木や真珠貝を持ち帰った。³⁵ このときロシア人が与えた銀貨は、土地の領主から幕府に提出され、幕府はこれを長崎のオランダ人に送り、その返事からこれが「ム（モ）スコヴィア」、すなわちロシアのものであるということが判明した。以上が日本側にとっての「元文の黒船」である。³⁶

おわりに

ソウザとゴンザをめぐる元老院所蔵の史料のあらまは以上の通りである。それらが物語の内容は当時のロシアをめぐる状況を如実に示している。端的に言えば、アンナ女帝のロシア政府は、18世紀の啓蒙思想に促されながら、探検（学術遠征）という大きな国家事業を展開し、中央アジアや中国、インド、果ては日本との交易関係を打ち立てることを目指していた。このことは、当時、ヨーロッパ世界が啓蒙思想とともに重商主義的経済思想に影響されていたことを考えると自然の成り行きであった。こうした目的のためにも日本人を利用して日本語通訳を養成することが重要であったのである。

日本人の利用はその後も考えられたが、実際の日本との交易樹立がなされないまま、彼らによって教育された通訳の出番はなかった。しかし、18世紀の終わり（1792年）、アダム・ラクスマン（А.К. Лаксман, 1766-1806年）率いるロシア艦隊が根室に来航し、翌年には松前で大黒屋光太夫たちを下しながら、拒否されはしたものの、日本に交易を迫ったのは、ロシアが積極的に交易を行なうという意味を明確に打ち出した最初の出来事であった。その背景には、もちろんイルクーツク商人団の願い書の影響も考えられるが、実際に、ロシア政府は交易を樹立する時が熟したとみなし、それを実行に移したの

³⁴ ミハイール号の航海日誌には、日本人漁船からの「贈り物」について記されている。平川監修、寺山・畠山・小野寺編『ロシア史料にみる18-19世紀の日露関係 第3集』、125頁。

³⁵ ヴァリトンからベーリングへの報告の中に、聖ガヴリール号による日本沿岸への航海について記されている箇所がある。同上、138-143頁を参照されたい。

³⁶ 高野『日本とロシア』、84-89頁。および加藤『シベリアに憑かれた人々』、81-84頁。

だといえるのである。³⁷

³⁷ この辺りの事情については、筆者が 27 年前に発見した以下の手稿史料に詳しい。Архив СПбИИ РАН (Санкт-Петербургское отделение института истории Российской Академии наук в С-Петербурге). ф. 36. оп. 1. д. 609. л. 1-71об.なお、筆者はこのことについて別稿を用意している。